

FIATにおける労使関係について（7）

— FIOM 指導部の離脱・交替および革命的サンディカリズムの動向 —

河 野 穰

1907年9～10月の第III回大会から1910年11月の第IV回大会までの時期にFIOMの中心的指導者の離脱・交替という事態が生ずる。また、これまでの稿でもいくたびか言及している革命的サンディカリズムの運動が頂点に達する。このふたつの事柄をトレースするのが本稿の課題である。ただし革命的サンディカリズムの運動については、1910年のFIOM IV回大会をこえて第I次大戦後の時期にまで範囲をひろげている。

〔 I 〕

1907年9～10月の第III回大会から1910年11月の第IV回大会のあいだにFIOMを去った中心的指導者というのは、FIOMの書記E.ヴェルツィ、C.ロッシらである。ヴェルツィは、1898年5月のミラノの騒動で北イタリアの金属労働者の金属諸支部中央委員会の運動が抑圧されたあと、ローマでIl Metallurgicoを再刊、中央宣伝委員会（Comitato centrale di propaganda）の名で金属労働者の運動の指導的中心を再建し、FIOMの創立時から書記の任務につけてきた指導者であり、ロッシも創立大会から副書記としてヴェルツィの協働者でありつづけた。このことはこれまでのいくつかの稿で明らかになっていることである。ヴェルツィ、ロッシにくわえてS.コッチャという書記も同じ時期にFIOMを去っているのだが、問題はこれらの書記の離脱がいかなる原因から生じたものであるのか、ということである。それは、いくつかの稿がトレースしてきたFIOM内部、またイタリア労働運動全体において展開されている路線をめぐる抗争に多かれ少なかれ関連した離脱であるのか、それとも原因が他のと

ころに求められる離脱であったのか？

この点について、FIOMの歴史をあつかっており、これまでの稿でもいくたびか引用しているV. Gianangeliの“Storia degli operai metallurgici”とM. Antonioli e B. Bezza編著の“La FIOM dalle origini al fascismo”がそれぞれどのように扱っているかをみておこう。

書記のFIOMからの離脱についてGianangeliは「ある時期、この組織は指導者がいなくなりました。」と記述し、AntonioliとBezzaの書物では「FIOMの組織の正確な状態はわからないが、ミラノにおけるふたつの集会(1909年5月20日と7月25日)のあと、FIOMの運命はB. ブオッツィを先頭とする新しい指導委員会の手に移った。」⁽¹⁾としている。

「指導者がいなくなってしまう」状態がなぜ生じたのかという理由についてGianangeliは組織状況の悪化と財政の悪化をあげ、さらにこのことの原因についてつぎのような諸点をあげている。生れたばかりの若い支部に地方主義的精神がつよいこと、労使紛争が長く継続しているため全活動をこちらに吸収されて組織活動、宣伝活動に力をいれられなかったこと、FIOMの本部をミラノへ移したが、ミラノでは諸潮流間の分裂・衝突がはげしく、この苦痛にみちた状態がFIOMのレベルに移しかえられて、組織の分解に近い状態が惹起されたこと、⁽²⁾さらに個人的性格という理由も状況を悪化させたこと、等々である。

AntonioliとBezzaの書物では「FIOMの運命がブオッツィを先頭とする新しい指導委員会の手に移った」理由として、「出入業者にたいするまずい扱い、支部との関係や宣伝、行動という任務における投げやりで厳しさのない態度」、⁽³⁾書記ロッジとコッチャの不正(横領)⁽⁴⁾」をあげている。

このふたつの書物の指摘はかなり相違するものだが、前者が離脱問題を生じさせたFIOM内外の全体的状況を明確にしようとしているのにたいして、後者は問題により近接した場における状況を捉えようとしていると見てよからう。このことを確認するために書記たちの離脱のプロセスをやや詳しくみることにする。

まずヴェルツィのばあいからはじめる。AntonioliとBezzaの書物に収録されている第III回大会記録では、書記局を構成する2名の書記にヴェルツィとロッ

シが指名されたことが明記されていることはすでにのべたとおりであるが、この大会記録は Metallurgico 1907年12月号の記録からとっているとされているのにしたがって同紙を確認してみても、当然のことながら同一のことが記載されている。⁽⁷⁾ところが Metallurgico のつぎの号である 1908年1月1日付から書記としてのヴェルツィの名前はいっさいあらわれなくなるのである。Metallurgico 紙上にはヴェルツィの解任等についての記載はみあたらないが、しかしヴェルツィがすでに書記の地位にないことは 1908年1月14日にひらかれた指導委員会の記録において明確である。

「ロッソが不在のとき、これを助けるため書記局にコルベッラを一時的にくわえる。書記局が補完されるまで運営においてロッソをたすける任務があたえられた。」⁽⁸⁾そして 1月21日にひらかれた指導委員会の記録は「中央書記局の補完のための公募がきまった」⁽⁹⁾とし、3月26日の指導委員会には「FIOMの新しい書記コッチャも出席した。」⁽¹⁰⁾としている。

それではヴェルツィはなぜ FIOM の書記からいなくなったのであろうか。Metallurgico 紙上には離脱の記事がないのだから、離脱の理由についても明記がないのは当然のことである。ただし Metallurgico はその原因らしきもの的一端にはふれている。つまり 1908年1月1日付 Metallurgico に収録されている 1907年11月5日の指導委員会の記録には、ヴェルツィについてつぎのような記述がみられるのである。

「《Itala-FIOM》の協約の解約のためにトリノにおくられたヴェルツィの報告が記録された。」⁽¹¹⁾

ここにあらわれている Itala-FIOM の労働協約については「FIATにおける労使関係について」⁽¹²⁾で詳しくのべたところであるが、この協約は FIOM により、また改良主義路線にたつ労働組合により高く評価されたものであり、FIOM 側の主役はヴェルツィであった。⁽¹³⁾ところがここで Itala-FIOM の協約の解消が検討されているのである。しかも第III回大会で採択された方針は、従来の路線をいささかも変更しようとするものではない。それではなぜこの時点で同協約の解消が検討の俎上にのぼっているのだろうか。Metallurgico はこの点についても明確なことを説明していないが、Itala-FIOM の協約の解消が問題にされ

ている理由としては、さしあたり、つぎのような事実とむすびつけて考えるのが妥当ではないかとおもわれる。Antonioli e Bezza の書物にはつぎのような記述がみられる。

「協約の信用性は、まず E. ジレットティが Avanti 紙上で明らかにしたように、労働者委員会のメンバーと砂糖独占に関係した Itala の金融家とのあいだの共犯の疑いによって、徐々に議論の対象となってきた。この線上で、社会党の調査委員会までが発動され、ムリアルディが—カビアーティとともに Itala と FIOM の仲介者であった—この町のすばらしい金属労働者を労働協約という絹の結び目にしばりつけるべくトリノの工業主から金をうけとっていたと、1907年12月にデ・アンブリスが反証なしに確認することができたのなら、そして FIOM の書記として労働協約に署名したヴェルツィが CGL と FIOM から解任されたのなら、有罪である、という結論に達せざるをえなかった。⁽¹⁴⁾」

この記述によれば Itala—FIOM の協約の締結にあたって、企業の側から労働者側に金がながれていたらしいのである。そして、P. P. Bellomi は、改良派と対立し、Itala との労働協約を攻撃していたトリノの革命的サンディカリストの機関紙 Il Grido del popolo の記事を援用しつつ、こうした金の授受がヴェルツィにまでおよんだとしている。

「労働者のふんがいは、その後の数カ月間に、FIOM の前書記ヴェルツィが、交渉のおこなわれたトリノへのたびかさなる旅行の費用払い戻しという名目で、前年、Itala から 1,000 リラをうけとっていたというニュースがひろがった時に、頂点に達した。ヴェルツィの行動は、たしかに議論の余地はあるが、労働組合指導者の反駁できない裏切りの証拠と判断される。⁽¹⁵⁾」

ヴェルツィはこのことが原因して書記を解任されたとみてよい。後述する 1909年7月25日の会議におけるコルベッラ、ベナート、ゲツィら(指導委員会等のメンバー)の発言もさらにこの推量を補強してくれるものと思われる。コルベッラはその発言のなかで「ロッシン同志はローマの苦痛にみちた推移のあとミラノにやってきて、FIOM が E. ヴェルツィをやっかい払いしなければならなかった諸事実について関係がないと表明した。⁽¹⁶⁾」とのべ、ベナートはまた、「中央委員会は、ヴェルツィについての調査の報告をうけるとだろうと通告をうけ

たが、今日までのところなにもうけとっていない。」と質問し、ゲッツィが「ヴェルツィの事件については、まだ調査が終了しておらず進行中なので、報告の発送もおこなわれていない。」⁽¹⁷⁾と説明している。

このような推移によって書記のヴェルツィがFIOMをはなれ、書記としてコッチャが補充されたのだが、ロッシとコッチャの両書記も1909年にFIOMをはなれることになる。このふたりの書記がFIOMをはなれる経緯については1909年8月20日付のMetallurgicoに詳しい。ただしこのMetallurgicoは、ロッシとコッチャがFIOMをはなれ、B. ブオッツィを中心とする新しい指導委員会が形成され、この新指導委員会によってまとめられたものであり、したがってヴァイアスがかかっている、つまりロッシとコッチャに一方向的にシヴィアーな内容になっているといえる。それはともあれ、このMetallurgicoによって問題の経緯をみておこう。まずMetallurgicoはつぎのように指摘する。

「すでに昨年(1908年—引用者)、ルーノのストライキ後から、とくにヴェルチェッリのストライキのさなかに、FIOMの状況と書記局の活動にほとんど満足できない、という声を通流しはじめた。

出入業者にたいするまずい扱い、支部との関係や宣伝、行動という任務における投げやりで厳しさのない態度、といった声があり、また、行動に誠実さがなく、組織の権威に密接にむすびついている人間的な権威の欠如について語った人もある。要するにわがFIOMを加盟支部から、また一般に組織からますます疎外させる影響力をもつうわさ話、疑いが堆積してきたということである。」⁽¹⁸⁾この引用の一部がAntonioliとBezzaの書物に採られていたことはすでにみたとおりのことである。

この不満を検討しようとする会合をトリノ支部が開催した。1909年4月6日、トリノのCGLにおいて、ピエモンテ支部の代表とFIOM指導委員会のいく人かのメンバーとの集まりがもたれたのである。もっともこの集まりは、ロッシ、コッチャに批判的な人々が期待していたような結果をもたらさず、FIOMへの信任投票をおこなうことをもって終わった。FIOMの指導的立場にある人々の多くはなおふたりの書記に信頼をよせている。ブオッツィ、コロンビーノ、モスコニーらがすでにふたりの書記にたいして批判を開始しているのである。

が、後になって彼ら自身もみとめたように、「わがFIOMをむしばんでいた病は単一の、そして簡単にコントロールできる一問題から生じたのではなく、すでにのべたように確認がひじょうに難しい一連の小事⁽²⁰⁾から生じた。」のであって、ふたりの書記にたいする批判を全体に拡大するにはなんらかの明確な契機が必要であった。ロッジ、コッチャにたいする批判者はこの契機を財政問題に求める。

1909年5月20日の集会⁽²¹⁾は、FIOMが財政問題を討議するために開いたものであるが、批判派は書記にたいして財政悪化の責任を攻撃するとともに、討議を財政問題にとどめず、通流しているうわさ等をふくめFIOMの経過についての調査を要求するのである。

まず指導委員会のメンバーであるゲッツィが、集会のひらかれた理由を説明する。「この集会は、必要な借金をするためにFIOMが赴いたトリノ支部によって開催された。トリノ支部はすでに数千リラを前渡ししたが、……集会でFIOMが真にどのような状況にあるのかを討議することを条件として、問題の金を貸す用意があると、われわれにこたえた。」ゲッツィが説明するFIOMの財政状況はこうである。「われわれは事実としてのFIOMよりも、名前だけの、財政が破局的な状況にあるFIOMを相続した。儉約が必要である一方、FIOMの財政すべてを吸いとってしまう青銅工のストライキが発生し、Piccola meccanicaからさいしょの借金をしなければならなかった。ついで鉄製家具工のストライキが生じ、これにもなんらかのことをしなければならなかったし、さらにルイーノのストライキが生じた。／よゆうがなく、しかもなにかをしなければならぬ必要があつて新たな借金を強いられ、こうして印刷会社からの借金、トリノ支部からの借金が生じた。ついでヴェルチェッリのストライキが発生し、われわれは全力をあげて支持し、これに12,000リラがかかったが、ヴェルチェッリの支部は一部を保証しただけである。

この借金はFIOMの活動を摩痺させ、固有の任務に対処することができない状況におとしいれた。

これに単一運営にむけられる臨時の支出がくわわり、各支部はこの支出をまだ払いこんでいない。」

そしてFIOMの支払いが滞った印刷会社がFIOMを告訴する。「われわれの新聞を印刷しているビエツラのMagliola社が、最近、その債権の故に、またヴェルチェッリ印刷coopをつくると脅やかされているという理由等で、われわれを訴えた。……Magliola社の訴えが決定的な圧力となり、われわれは再度トリノ支部におもむかざるをえなかった。」⁽²²⁾

財政状況にかんするゲッツィの報告ののちさまざま観点から書記、指導委員会への批判がのべられる。この批判をいく点かにまとめてみると以下のとおりである。第1点はFIOMの借金が過大になりすぎていることに関してである。「どの産業別組合も借金をもっている」というロッソの発言にたいして、ブオッツィはこう批判する。「そのとおりだ。どの産業別組合も借金をもっている。しかし借金につぐ借金となると事態はちがってくる。建設組合も何千リラという借金をおっていることを私も知っている。しかしそれは規則正しく支払われる正規の借入である。」⁽²³⁾

批判者はまた、とくにヴェルチェッリ支部が過大な借金を背負わされ、それがヴェルチェッリのcoopを破壊していることを強調する。コロンビーノは「ヴェルチェッリ支部は1,680リラの借金に耐えている。」と発言し、さらにトリノの集会の経過と、債権者をなだめるためヴェルチェッリからビエツラへおもむいたときの話をし、ヴェルチェッリ支部からトリノ支部へ送られた嘆きと非難の書簡をよみあげた。この問題をめぐってブオッツィとロッソはつぎのようなやりとりをおこなっている。

「ブオッツィ われわれは小さなcoopに借金をしており、それらのcoopはわれわれを原因として破産の危険におちいつている。

ロッソ しかしヴェルチェッリでは、われわれがどんな条件にあったかを知っていた。

ブオッツィ いいや親愛なるロッソ、あなたの言うことを疑うのを許してほしい。ごく小額の資本金しかもたない小さなcoopが、いつ返済されるのかもわからないのに、われわれに何千リラもぜいたくに貸せるとは考えることができない。私は語られているすべてを信じたいとは思わない。しかしヴェルチェッリの非金属労働者が、返済されるのか否かも知らずに彼らの預金を支部に貸す

ことができると信ずるのは、明らかに誇張だといわないわけにはいかない。ルーイーノのストライキのためにも絶対にまもれないことが約束された。……ヴェルチェッリの coop は FIOM のせいで半ば破壊された。⁽²⁵⁾」

批判は、さらに会合にヴェルチェッリ支部を招いていないことにふれる。「モスコーニ 多くのことを明らかにでき、書記局への新たな批判にたいしても明らかにできるヴェルチェッリ支部を招かなかったのは誤りだ。

コルベッラ ヴェルチェッリの代表がいらないのに、ロッシはこの問題を取りあつかうべきでない。⁽²⁶⁾」

そしてヴェルチェッリの coop からのメモに回答していないことも批判される。

「ゲッツィ ソマッリーノ（ヴェルチェッリの coop 会長—引用者—）からうけとった書簡を指導委員会にわたし、すぐに回答するよう書記局にすすめた。

ブオッツィ 回答はなかった。

ゲッツィ 回答がなかったとしても、なにをすべきかわからなかった。

ブオッツィ 回答がなされるよう保証すべきであった。

ゲッツィ しかし私には書記の言葉を信じる権利がある。

ブオッツィ そして指導委員会のメンバーとして細心に観察し、監視する義務がある。⁽²⁷⁾」このやりとりのあと、コッチャはソマッリーノの書簡について説明し、まだ答えていないとしている。

批判者たちの批判は財政問題をこえて他の領域におよび、FIOM にたいする一般的な不信や疑惑から、さらにロッシの個人的借金というややスキャンダルめいた問題が提出される。ブオッツィは「FIOM のあらゆる活動推移はいたるところで論議をひきおこしている。たしかにいまのところ大きな事件はない。しかしわが FIOM が極端な不信に囲まれているという陰にこもった、根強いおしゃべりで充ちている。⁽²⁸⁾」と指摘し、またコロンビーノは、「ロッシのフィエッティ食堂への借金⁽²⁹⁾」について言及した。

そして最終的には批判者はこれらの諸点を明確にするための調査を要求する。コロンビーノはこういつている。

「たとえこの集会から詳細な事実が生じなくとも調査に賛成である。イタリア

中で FIOM の財政上、モラル上の失敗が語られている。すべての組織が借金をもっているとの発言があったが、借金が破産の恐れをもたらすなら、修正することが必要である。⁽³⁰⁾ 指導委員会のメンバーであるコルベッラも調査をうけいれると発言している。

「指導委員会のメンバーは、FIOM のためによりよいことをおこなったと確信しており、調査はメンバーにたいする不信を表明するものだと感ずるが、調査をうけいれる。⁽³¹⁾」

以上が、FIOM 指導部、とくに書記にたいして批判者のあげた問題点であるが、創立以来 FIOM をとりかこんできた状況、つまり、各レーガの独立性がたよく、FIOM 中央への帰属意識が稀薄であり、組合費の中央への払いこみは遅れ、各地域に中央の指導と無関係にストライキが頻発し、FIOM 中央はストライキを放置しておくわけにいかずに援助金等の支出を迫られる。さらに労働運動全体をまきこんでいる改良派と革命的サンディカリストの抗争、こうした状況は生れたばかりの組織にとってきわめて困難なものであって、だれが指導者の位置についても事態は類似したものであったように思われる。それでもブオツィら批判者は、書記の責任を問うているのである。

ロッシは、Magliola 社の訴えについては「ビエッラで、Magliola が明らかにした額と、われわれの額の間に異議申立てがあったことを説明した。Magliola が額を小さくしたという事実が、われわれの側に道理があったことを証明している。⁽³²⁾」と説明、また「フィエッティへの借金について、ストライキ実行者のために彼の財布が空になっていたから生じたのだ。」と発言し、彼にむけられた批判の本質が彼個人にむけられた個人的性格のものであると主張した。ロッシは「彼個人にたいしておこされたこの戦争は、ダラゴーナがトリノに行ったときから始まっていることを明らかにし、ダラゴーナとの会談に言及した。ダラゴーナの立場が、イタリアの各支部に影響をあたえて FIOM に反対させることを心配している。ダラゴーナの活動については委員会に訴えた。⁽³⁴⁾」と発言している。

5月20日の会合ではブオツィらの批判はなお多数をかくとくしていない。パッレリーニも、FIOM がストライキへの援助をおこないすぎるとの批判的立

場をとりつつも、調査には反対している。

「FIOM の方向に反対である。しかし調査をするケースだとは思わない。この混乱の理由は、FIOM の運営のための資金をストライキの補助金につかったことであると主張した。指導委員会に規約の遵守を求め、FIOM はストライキを補助すべきではないとのべた。」⁽³⁵⁾

調査を要求する提案は票決にかけられ、投票総数 23, 賛成 2, 反対 10, 棄権 1 で提案は否決された。賛・否・棄権の合計と投票総数があわないが、⁽³⁶⁾ Metallurgico の数字をそのまま掲げておく。

以上のように 5 月 20 日の集会ではロッシ、コッチャにたいする批判派の調査をおこなうべきだとする要求は、多数をかくとくしえなかった。批判派が多数をえるには、「材料となる事実、小さなスキャンダルが必要だった。このスキャンダルが生じた。」⁽³⁷⁾そして 2 人の書記はあっけなく FIOM を去る。

7 月 25 日の会合にはすでにロッシとコッチャは出席していないのにたいして批判派のプロツィが指導委員会臨時メンバーとして出席している。⁽³⁸⁾この日の会合で、指導委員会のメンバーであるコルベッラはこうのべている。

「書記のコッチャが辞任して FIOM を去るとき、運営の状況と、それに関連した 2,166.26 リラの欠損となっている金庫を統制委員会に引渡さなければならなかった……。コッチャはこの欠損のうち 559.56 リラを借りたと表明し、残額については書記のロッシが答えるべきだと表明した。

この状況についてすぐにロッシに質問がなされ、ロッシはさまざまな任務と、ミラノに家を設けるのにつかったさまざまな出費、⁽³⁹⁾とくにこの市に滞在したさいしょの数日につかった出費をあげて自己の行動を正当化した。……さらに、彼の私的状況は FIOM の名でつくりだされたのだから、引きだす権限をあたえられているはずだと言った。……書記のロッシは、上に言及した会合と、苦痛にみちた不正発見の 3 日後、一通の書簡をのこして姿を消した。書簡のなかでロッシは自分のこどもたちにパンをあたえねばならない義務をあげて、仕事を探すので欠席せざるをえないといい、帰ったらただちに委員会を召集することを約束していた。しかしこの時から姿はみられない。

指導委員会はさらに書記のコッチャが議事録を持ち去ったことをつたえた。⁽⁴⁰⁾

批判派によれば、「それは有益なスキャンダルであった。」⁽⁴¹⁾

こうしてロッジとコッチャの両書記はFIOMを去ったが、ブオツィらの攻撃は財政上のスキャンダルをのぞけば書記の個人的資質、能力への批判であった。たとえばコルベッラは、「われわれは、ふたりが若干の分担金によってFIOMを指導し、FIOMを強力なものにすることができる并希望して、わがFIOMの運命を委ねたのだが、われわれはこのふたりの怠け者(scioperati)によって欺むかれ、いまも欺むかれつづけている。」⁽⁴²⁾とのべ、コロビーノは、「書記の無鉄砲な行動、ストライキにおいてのおしゃべり、確言や約束での真面目さや正確さが欠けていた。」⁽⁴³⁾ことを強調している。

こうした批判に指導者の個人的争いがからんでいたともいえよう。5月20日の会合で、この争いがロッジ個人にたいするものであり、とくにダラゴーナ(後にCGLの書記長、改良派の大物)がからんだ争いだ、とロッジが発言したことをのべたが、7月25日の会合でもスコッチィが同趣旨のことをのべている。

「ロッジはFIOM内での支配をつよめるため、ルドヴィーコ・ダラゴーナが書記に採用されないように一生懸命になった……。」⁽⁴⁴⁾

7月25日の集会は結論としてロッジとコッチャの会計上の責任について調査することを確認するつぎのような決議を満場一致で確認する。

「集会は、書記ロッジとコッチャの活動のおかげでFIOMの金庫に生じた欠損について指導委員会の説明をきき、不足額についておこなわれる調査で上記の者に責任がある場合の措置は保留する一方、将来のためにFIOMの指導者の側の慎重さを望み、決議にうつる。」⁽⁴⁵⁾
スコッチィーコロビーノ」

さらに集会は、書記の離脱にたいする責任により指導委員会の辞任を承認する。この指導委員会は第III回大会の決定にしたがってFIOMの本部がおかれるミラノ支部に属する者から構成されていたが、同指導委員会の辞任後ミラノ支部がひきつづき新しい指導委員会を形成するか否かが当然議論的になる。ロッジとパッレリーニが提案した決議案はこの問題についてつぎのように判断している。

「現行の指導委員会が書記たちにもっていた善意の信任と信頼のためにその書

記によって裏切られたことを確認し、同委員会の辞任をうけいれ、／ミラノで再形成される指導委員会は組合員のあいだに不信をもたらすこともあるだろうと考えて、FIOMを他の場所にうつすことを決定し、新たに選出された委員会にたいして、書記のひきおこした欠損がどれだけになるかを詳細に明らかにすることを付託し、上記の欠損を償還するために裁判上の処置をふくめてすべての処置をとる権限をあたえ、FIOMの規約に詳述されている規定により2人の書記の不正にたいして可及的速かに措置をとることを付託し、／将来、FIOMのモラル上、運営上の機能がFIOMの同志たちの望みに一致するよう注意ぶかく監視しうることを付託する。署名者 ロッソーパッレリーニ」⁽⁴⁶⁾

この決議は、ロッジ、コッチャの体制を変えるために積極的にうごいてきた闘志にみちたブオッツィにはうけいれることができない。本部がミラノから他へうつされれば、指導委員会は、そのメンバーにより構成されることになり、ミラノを根拠とするブオッツィは指導委員会にはいりえないからである。彼は猛然と本部の移動に反対する。

「決議のほぼすべてに本質的に同意するが、FIOMを他の場所にうつすことを提案している部分は必要ないと考えるので、同意しない。」⁽⁴⁷⁾と発言、議事を中断するよう求めてミラノの各支部を説得する。ミラノの各支部はブオッツィの説得をうけいれ、ブオッツィは同支部の名で、「ミラノ支部は自分たちの内部で、FIOMの必要とイタリア金属プロレタリアートの信頼に対応した新しい指導委員会を指名することができると思う。」⁽⁴⁸⁾と約束した。ブオッツィの修正をくわえたロッソの決議が投票にかけられ、多数を得て承認される。

集会で確認された新しい指導委員会のメンバーは、B. ブオッツィ、M. カッターネオ、F. グリッティ、L. ファップリ、A. オレフィーチェ、G. カシミーロ⁽⁴⁹⁾である。

なお1910年11月に開催されるFIOM第IV回大会においては、マッシーギがロッジ—コッチャの問題を、夕方に、特別秘密会をひらいて討議することを提案して、大会はこれを了承し、さらに秘密会は、この問題について指導委員会に⁽⁵⁰⁾いかなる決定をもおこなう権限を委ねる、ことを確認している。⁽⁵¹⁾

〔II〕

〔I〕でトレースした FIOM 書記の離脱、指導部の交替は、その経過にみたようにイデオロギー上の対立、路線をめぐる抗争に起因するものではなく、FIOM の組織的弱体化、財政的困難についての指導部（とくに書記）の指導責任および事務処理上の不適正が問われたものであった。この組織的弱体化、財政的困難の基礎として各レーガ、各支部の従来からの独立的傾向の継続、改良派と革命的サンディカリストの対立があることは、これまでの諸稿で指摘してきたところであるが、こうした基本的な構図は FIOM 第III回大会後においてもいささかも変わっていない。

Metallurgico は各レーガ、各支部の独立的傾向がいぜんとしてつよく、FIOM 中央への帰属意識が稀薄であることについてくりかえし批判をおこなっている。たとえば 1908 年 1 月 1 日付の同紙は「中世からの郷土主義的な感情の残渣という伝統に、労働者階級の防衛機関を、混沌とした、当惑させるような、戦闘性をもたず、不成功の連続に運命づけられた行動に向けさせた惰性、怠惰、保守主義が結びついている。」と地方支部の独立性を批判し、また同年 10 月の Metallurgico も、「FIOM が一般にその正当な価値で評価されない理由のひとつが、FIOM に加盟するレーガの行動を規制する規則と規約が無数に相違し、しかも、しばしばあるものが他と対立、FIOM の基本的な規約と対立しているという事実にあることには、だれも異議をさしはさむことができない。このことから FIOM の機関にとって致命的であるところの同質性の欠如がうまれる。」⁽⁵³⁾と FIOM 中央への凝集力の弱さを嘆いている。

FIOM の組織的弱体化、財政的困難のもうひとつの基礎である改良派と革命的サンディカリストの対立・抗争、革命的サンディカリストのうごきについてつぎにみておくことにする。

「CGL にたいする革命的サンディカリストの反乱は 1902 年から 1912 年のあいだにおいて……イタリア労働運動史のもっとも重大な、そして確かにもっとも苦痛にみちた事実であった。それは前代未聞の激烈な論争によって特徴づけられる。」⁽⁵⁴⁾

1906年ころまでの革命的サンディカリストの動向については、すでに「FIATにおける労使関係について(6)」で考察したところだが、革命的サンディカリストの運動はその後も内部に論争をかかえながら、改良派との対立・抗争を継続するのである。「1906～1908年は第I次世界大戦の前に革命的サンディカリストが最大の力をもった時期⁽⁵⁵⁾」であって、1907年はこの運動のひとつの転換の時点である。「1907年は、一地域以上(とくにパルマ、フェッラーラ、ピオンビーノ)において生じた従来の穏健な地方的サンディカリズムの放棄、直接行動の完全なうけいれ、政党の拒否を特徴とする、こうした進展の転換点⁽⁵⁶⁾であった。」

こうした力の増大と運動の転換は、当然内部に分岐の芽を熟成させつつ進行する。1907年6月29日から7月1日に革命的サンディカリストはフェッラーラでさいしょの全国レベルの大会を開催する。この大会についてA. Andreasiの“L'Anarcosindacalismo in Francia, Italia e Spagna”ではCongresso di Ferrara—il primo congresso tenuto dalle organizzazioni sindacaliste italiane a livello nazionale⁽⁵⁷⁾—、つまりフェッラーラの大会—イタリアのサンディカリストの諸組織が全国レベルにおいてさいしょにもった大会—、としている。すでに〔I〕でふれたように、Congressoは通常特定の形をととのえた組織の大会をさす。1907年6月29日から7月1日のCongresso di Ferraraはすでに形をととのえた革命的サンディカリストの組織の大会ではないと思われる。あるいは革命的サンディカリストが掌握しているフェッラーラのカーメラ・デル・ラヴォーロのCongressoに、いくつかの地方のカーメラ・デル・ラヴォーロ、産業別・職業別組合の地方支部、あるいは全国組合、社会党支部等で多数をにぎっている革命的サンディカリストが出席したものかともおもわれるが、しかし後述するように、この会合で採択された「CGLについての決議」は、「サンディカリストの大会(il Congresso sindacalista)は」と自らのことをよんでいるのであって、ここでは革命的サンディカリストのさいしょの全国レベルの大会としておく。

この大会において社会党との関係をめぐって論争・分岐が生ずる。すでにトレスした革命的サンディカリズム運動の一定の進展、1905～06年の鉄道組合のストライキ、トリノのゼネストを指導した経験にたつて、地方の運動の新しい指導者たちが社会党との関係の消滅をうちだしたのにたいして、ラブリオー

ラヤレオーネらインテリ出身の政治家・理論家たちは関係の消滅に反対した。比較的穏健なグループも後者に同調したものの、旧指導者たちの主張は採決にやぶれ、彼らは革命的サンディカリズム運動の指導部からしりぞくことになる。フェッラーラ大会におけるこの論争についての資料は手元にないのだが、社会党内に留まっている革命的サンディカリストが党大会に出席すべきか否かという論議が1年後におこなわれ、そのなかにフェッラーラ大会で展開されたものに類似するとおもわれる論議がみられるので、それを若干トレースしておこう。

M. ビアンキは積極的な社会党離脱論者である。「5年のうちに、10年、15年のうちに勝利する希望をもって大会に参加するのかわ？ 病人の夢でなくて、だれがこのような妄想に達することができよう。」⁽⁵⁹⁾

ビアンキは、サンディカリズムの内容を理解するにいたった者は、革命的サンディカリズムが社会党内で勝利すると希望することができないとする。なぜか？ ビアンキは答えを社会党の組織構成の側面にもとめる。

「非常にさまざまな、かつ、等質的でない社会階層にある人々を結合した機関は、同機関を構成するある一グループの排他的必要にこたえる行動を表現することができない。／このことが一時点で実現したとしても、同機関を構成する他の諸勢力はただちに雪辱をはたすだろう。この機関はその存続のためにジグザグの路線をとらざるをえない。党におけるサンディカリストの勝利という奇蹟は、サンディカリズム自体の理論的・実践的失敗であろう。」⁽⁶⁰⁾

こうした社会党離脱論者にたいして、少数の革命的サンディカリストは、離脱に反対した。この反対論の根拠は論者によって若干異なっている。1908年7月19日付“La Propaganda”でR. モミリアーノは、「われわれはフェッラーラの大会決定をうけいれるべきだとは思わない少数のサンディカリストに属する。」として、その理由を社会党が出发点にもっていた戦闘的体質、およびサンディカリズムはそれと異なる理論でなく、そこへの回帰をめざす運動だという点にもとめている。

「この党が、議会の成果から遠いために政治的日和見主義を知らず、…その活動によってプロレタリアートのなかに強紐な階級意識を形成しようとしていたよき時代に、社会党の戦列にくわわったミリタンであるわれわれは、この

党が固有の道をふみまよい、固有の相ぼうを捨てさり、献身が社会主義のペテン師のラベルをつけた弱々しい小ブルジョア的ラディカリズムにおける献身におわたつたのを、ふかい苦痛をもってながめた。／勤労者に解放の唯一の手段として階級組織をさしめしているサンディカリズムは、われわれには、新しい理論としてではなく、社会主義の基本的概念への回帰としてあらわれている。／それ故われわれはもはや社会党のなかにいることができないとおもえず、むしろ党のあらゆる革命的内容を空にした人々が、もはやここにとどまることができないようにおもえるのである。」⁽⁶¹⁾

ラブリオーラによる社会党の把握はモミリアーノよりもシヴィアーで、この党の本質を共通性をもたない地方的利益の巨大な総和、穏健さ、選挙ブロック・連合・閣僚投票のみへの関心だとする。

「今日、社会党は教会、裁判所につづいてわが国最大の政治勢力である。この党にこのような力が生じたのは、この党が……地方的利益の巨大な総和を強固に組織することができたことによる。この党の幸運は自身の穏健さに由来し、そしてその穏健さという本能を強めるよう強力に作用した。この地方的利益の総和はたがいに支えあい、強めあい、社会党がまったく異なった地方的利益の強固な組織以外のものでないのに、全国政党であるかのような印象をあたえるまでにいたった。／これらの利益は、その差異の故に、選挙をとおして達成される公的諸機構による防衛という必要以外に共通性をもたない。もっぱら選挙のための党は、いずれも、その定義の故に同質利益を代表しない党である。……社会党が誕生のはじめから選挙『ブロック』、連合、閣僚投票以外に関心をもたなかった理由は、このように説明される。」⁽⁶²⁾ それにもかかわらずラブリオーラは革命的サンディカリストが社会党を離脱することに賛成しない。イタリア社会全体のもっている戦闘性が未成熟であり、革命的サンディカリズムはただちに大衆を掌握・指導するところに到達しえないだろうというのがその理由である。

「サンディカリズム自身も幻想をえがいてはならない。われわれの国は闘争的な伝統をもっていない。／社会的闘争は、伝統・地方的衣装、一般にひろがっている無智で歪曲されたせまい市町村の囲いのなかで断片的におこなわれている。サンディカリスト支部の中核が代表するエネルギーな、権力奪取の政

策は大衆の広範な同意をあてにすることができない。……サンディカリズムは労働者運動の遠い現実であって、現在の事実ではない。」^(63,64)

社会党を離脱すべきか否かをめぐる論争は、おおよそ以上のような内容でおこなわれたが、論争の結果はすでにのべたように、運動の実践にたずさわって精神を高揚させている離脱論者たちが多数を制し、「サンディカリストの大多数が党をはなれ、……組織にとどまる忍耐力をもっていた同志はわずか」⁽⁶⁵⁾であった。

革命的サンディカリズム運動の社会党からの離脱はこうして結論がついたが、CGLとの関係をいかにするか、分離するか、内部で闘争をつづけるのかの論争はその後も長く継続する。フェッラーラの大会においては、CGLにきびしい観点をもちながらも、これに対立する他の機関の設立を追求することは誤りだとし、内部で指導権をかくとくするという決定をおこなっている。決議はまずCGLについて「サンディカリストの大会は、CGLを、うけいれる必要のある達成されたひとつの事実」とし、「CGLと対立する他の機関を創設しようと希望することは、われわれの原則に対立するものであり、他方ではCGLと無関係になることをのぞむのは単純かつ誤りだ。」とする。もとより革命的サンディカリストは、改良派が指導権をにぎるCGLをきびしい目でみる。「CGLは指導部の構成からみても、機能からみても勤労者階級の熱望にこたえるものでない。」したがって、「サンディカリストの路線上にあるすべての組織は、CGLを変質させる仕事を達成し、真の指導的核心であり、闘いを導びく機構を短時間でイタリアの組織されたプロレタリアートにあたえることができる活動的で、エネルギーかつ機能的な強い核を形成するという単一の、正確・明確な目標をもって、まとまってCGLに加盟することを決定する。」⁽⁶⁶⁾のである。

しかしCGLが社会党との関係を緊密化し、革命的サンディカリストとの対抗関係を強化するにしたがって彼らの内部にCGLからの離脱を求めるグループが強まることになる。同年11月の2日から3日にかけてのバルマのカーメラ・デル・ラヴォーロの大会にあつまった革命的サンディカリストは、⁽⁶⁷⁾①CGLがその運命を一政党の運命にむすびつけていること、②CGLが集中化した機関であること、③したがってCGLは傘下各組織の自由なイニシアティブを抑え、制限

している、といった諸点について批判をつよめ、「CGLにたいして、正統的な解釈者であり、プロレタリアートの代表であると名の権利を決然として否認⁽⁶⁸⁾」する。そして革命的サンディカリストはCGLからもはなれ、ポローニャに本部をおく全国抵抗委員会（Comitato nazionale della resistenza）を設立し、バルマで機関紙L'Internazionaleを発刊することを決定した。全国抵抗委員会の規約は、ポローニャのカーメラ・デル・ラヴォーロ加盟者のなかから執行評議会（Giunta esecutiva）を指名し、さらにピアチェンツァ、フェッラーラ、バルマ、アンコーナのカーメラ・デル・ラヴォーロの各代表1、鉄道組合が正式に加盟したばあい、同組合の代表1からなる評議会（Consiglio）を指名することを定め⁽⁶⁹⁾ている。

経済恐慌という要因もくわわって、この時期革命的サンディカリストはストライキを頻発させ、1908年春にはバルマの農業労働者の紛争をゼネストに拡大させる。この紛争は本節の冒頭でものべたような革命的サンディカリストの運動の頂点を形成するものであろう。紛争は1年前に署名した協定の解釈をめぐる争いを出発点としている。各レーガが協定の尊重にくわえて、労働組合側の職業紹介事務所を当該地区における唯一の労働力配分者として承認するよう要求したのにたいして、農業家がこれを拒否し、1908年5月1日労働者側はゼネスト（ただしバルマ地方の）を宣言する。農業家協会もただちにロックアウトを宣言する。バルマ県内の17のムーネの全産業部門の労働者がゼネストに連帯し、ストライキが頂点に達した時点では30,000人以上の労働者がくわわったという。この時期は刈りいれの時期でもあり、農業家もストライキ破りを動員し、これをめぐって暴力、テロもおこなわれた。

『6月29日、バルマにはスト破りの大集団が到着した。労働者たちは駅にかけつけ、警察とのほげしい衝突が生じた。騎兵隊がストライキ参加者におそいかかる。』ストライキ参加者はオルトレトッレンテ労働者地区にふたたび閉じこもり、軍隊の攻撃にもちこたえることができた。バルマは3日間ふたつに分割された。だが政府側の圧倒的優位は明らかである。『何百人というデモ参加者が逮捕された。—デ・アンブリス、カーメラ・デル・ラヴォーロの指導者もふくめ—何百人もが逮捕をまぬがれるために逃亡したという。カーメラ・デル・ラ

ヴォーロは警察に占拠された。⁽⁷⁰⁾』こうしてバルマのゼネストは労働者側の全面的な敗北をもっておわる。

上の引用はこの時期の革命的サンディカリストの高揚した気分の一端を示してくれるが、それにもかかわらず、ゼネストの敗北によって「革命的サンディカリズムは確実に打ちのめされ、……改良派はCGLのヘゲモニーをつよめ、……革命的サンディカリストは不人気になり、いくつかの地帯では大衆のいっそう穏和な立場への流出がみられた。⁽⁷¹⁾」

1908年9月6～9日、モーデナでひらかれたCGLの大会は、自らの任務についての決議のなかで諸政党との関係の維持を再確認するが、この決議はCGLの革命的サンディカリズムにたいする冷やかな回答である。しかしバルマのゼネストの敗退によって高揚した気分が沈静しつつある革命的サンディカリストの側は、CGLの大会の2カ月余り後、おなじモーデナで会合をひらき、とくにCGLとの関係を再考する。この時点では、CGL内で階級闘争を基礎にした労働組合の統一を追求する主張が、かかる統一はCGLを通じては達成できないから、新しい労働組合組織設立の方向をとることが不可避だとする主張にたいして多数をかくとくしている。⁽⁷³⁾そして多数意見にしたがって、いくつかの県で革命的サンディカリスト系のカーメラ・デル・ラヴォーロとCGL系のカーメラ・デル・ラヴォーロと統一、あるいは革命的サンディカリスト系レーガをCGL傘下の産業別組合に加盟させようとする試みがおこなわれたが成功していない。

1909年5月9日の革命的サンディカリスト系組織の大会⁽⁷⁴⁾でもCGLとの関係が論議の中心問題となっている。この大会では宣伝委員会 (comitato di propaganda) を設置し、同委員会がCGLの指導者と交渉して直接行動の戦術にしたがっている全組織がCGLにはいる、という結論をだしているが、同時に、しばらく前に停刊されていた“L'Internazionale”を再刊すること、また秘密委員会を設置して大衆をつねに行動に用意させておくことを決定しており、このことは当然のことながらCGLとの交渉を困難にした。⁽⁷⁵⁾

このように1908年後半から1910年にかけて革命的サンディカリストの高揚は後退するのだが、1911年という年はリビア戦争の勃発にもなって労働者運動の基軸が左へ移行する年であるといえる。この年の10月15日から18日にか

けてモーデナでひらかれた社会党の臨時大会においては、植民地かくとくに肯定的な改良派右派と反植民地派の対立があらたに生じ、ビッソラーティ、ボノミ、カビーニ、ベレニーニら改良派右派は圧倒的に破れ、以後、社会党内では左派が指導権をにぎる。そしてこれに歩調をそろえるかのようにこの年から1913年にかけて革命的サンディカリズムの復活もみられるのである。とりわけピオンビーノの製鉄企業、トリノの自動車産業、ミラノの金属工業における労使紛争のなかで、労働者側内部において改良派と革命的サンディカリストがはげしく対立した。このうちトリノ自動車産業の労使紛争における革命的サンディカリストの滲透については、すでに「FIATにおける労使関係について⁽⁷⁶⁾」でトレースしたところである。革命的サンディカリズムの影響力の一定範囲での復活のなかで、革命的サンディカリストは、再度、組織の編成につとめる。1911年に直接行動委員会（Comitato dell'azione diretta）の設置をきめるが、それにとどまらずさらに労働組合の下部組織を整備し、各産業部門に産業別全国組合を設立せよとの主張がさかんにおこなわれ、1912年11月にはCGLに対抗するUSI（Unione Sindacale Italiana）を設立するのである。

直接行動委員会は、革命的サンディカリストの諸組織を調整し、CGLに対抗して行動させることを目的として、1911年12月のボローニャ大会で設置が決定され、1912年3月31日のバルマの集会で規約が承認されたものである。規約は、同委員会が活発に活動を展開できるよう全加盟者に5チェーンテージモ⁽⁷⁷⁾を納入するよう定めている。

革命的サンディカリストはCGLに対抗すべく全国抵抗委員会、直接行動委員会といった組織を設立してきたが、これらの組織を構成する基礎組織はどのようなものであったのか。1907年のバルマのカーメラ・デル・ラヴォーロの大会および1909年の大会に参加した組織は注(67)と注(74)で言及しているとおり、12ないし13のカーメラ・デル・ラヴォーロ、鉄道組合をふくめたふたつの職業別組合、その他の小レーガである。当時の労働者組織、とくにここでは革命的サンディカリストの影響下にある労働者組織は、後述するUSI設立にくわわった組織の一覧表をみるといっそう明確にイメージできる。同一覧表のさいしょの段にあるカーメラ・デル・ラヴォーロについてはとくに説明することもない。

第2段にある産業別・職業別組合はいずれも県段階の組合である。CGLの傘下にある産業別・職業別組合が、各支部・各レーガの独立性に悩みながら全国federazioneを結成していることは、FIOMを例としてこれまでの諸稿がトレスしてきたところであるが、革命的サンディカリストの側ではまだ地域段階の組織にとどまっている。これらの県レベルの産業別・職業別組合もまた各レーガから構成されている。第3段には、第2段の産業別・職業別組合にもくわわらずに個立した、または独立したレーガが数多く示されている。これらのレーガは20人から100人の単位の組織で、職業ごとの結集体である。⁽⁷⁸⁾

20世紀初頭のイタリアの労働組合運動においては、この第3段にみられるような職業ごとの地域的結集体が、地域ごとの産業別結集体、さらに全国産業別・職業別結集体へすすもうとする推力と、従来どおりの自立性・独立性を維持しようとする推力とが、たがいに押しつ押しされつをくり返すプロセスが、いたるところにみられたとってよかろう。そのなかで革命的サンディカリストは産業別・職業別全国組合の中央機関への権限の集中に反対してきたのだが、しかし地域の職業別レーガの分散状況をそのまま肯定しているわけにもいかない。こうして1911年からの革命的サンディカリズムの影響力の一定の範囲内での復活にあたり、組合の組織体制の整備が主張される。整備の方向は下部のレベルでは職業ごとのレーガではなく「特定の生産サイクルにくみこまれている労働者をグループ化した」「単一レーガ、または単一組合」、実際的には「工場の労働組合」⁽⁸⁰⁾の設立であり、産業レベルでは産業別組合の設立、さらにナショナルセンターの設立である。

このうち「工場の労働組合」については、コッリドーニが首唱して「1911年中にミラノの数多くの工場に多数の単一レーガが設立された。」⁽⁸¹⁾というていどのことしか手元の資料ではわからない。

産業別全国組合の結成については、コッリドーニ、トリノの革命的サンディカリスト系金属労働組合、その書記のC. ネンチャーニらがきわめて活発に発言をおこなった。1912年10月12日付のL'Internazionaleにおいてトリノの金属労働組合は、「自動車部門の労働者に損害をあたえたFIOMの裏切りの結果、L'Internazionaleをとうして……イタリアの金属労働者の同志に……エルバ島

の鉄鉱採掘労働者をふくめた金属労働者全国組合 (Sindacato metallurgico nazionale) の設立をうったえることを決定した⁽⁸²⁾」とのべ、また L'Internazionale 1912 年 11 月 2 日付でネンチーニはつぎのように発言している。

「可能なかぎり短時間に金属全国組合を設立し、この金属全国組合によって他の労働組合を設立する仕事を開始して、こうして全国直接行動委員会をその全構造において完成する必要が生ずる。／こうしてこそ真の階級的統一に達するであろう。」⁽⁸³⁾そして前出のトリノ金属労働組合の主張では、「われわれはモダナにおける直接行動委員会の大会のさいに、さいしょの会合を準備する。」とのべている。

問題は、CGL 傘下の産業別組合と革命的サンディカリストが結成をよびかけている産業別組合とではどのような点に差異があるのかということである。この点に関連してまず第 1 に気がつくことは、CGL 傘下の産業別労働組合が一般に federazione nazionale の名称をもっていたのにたいして、革命的サンディカリストの提唱する産業別全国組合は sindacato nazionale という名称があてられていることである。sindacato という名称をもつ主たる組合は、当時革命的サンディカリストの支配下にあった鉄道労組だけである。federazione という名称は各支部の連合を意味しており、FIOM を悩ませていた各支部のつよい独立的傾向という当時の状況を反映しているようにおもわれ、これにたいして sindacato nazionale は federazione でないぶんだけ中央への力の集中がつよいようにもおもわれるが、しかし中央への権力の集中は革命的サンディカリストが非難してやまない点であって、したがって federazione nazionale と sindacato nazionale は単に名称上の差異にすぎず、革命的サンディカリストも sindacato に特別の内容上の意味を付与してはいないようである。事実 1913 年 11 月の USI 大会へのクッザーニの報告も「われわれは federalismo という言葉をつかう。なぜなら federazione または sindacato ⁽⁸⁴⁾であれ、言葉が違うことをのぞけば、実際的な意味は同一であるからである。」としている。

運動への指導的機能という点では、むしろ革命的サンディカリストの提唱する sindacato nazionale のほうが CGL 傘下の federazione nazionale よりも弱い

といえる。前出のトリノ金属労働組合は *sindacato nazionale* の機能について、「官僚的な、合法的な *FIOM* の任務は終了した。なぜならプロレタリアートは *FIOM* に共鳴せず、その地位をより自由な機関に、そして地方の労働組合にもっとも完全な運営上の自立性をあたえつつ、また単に階級闘争と直接行動の基準の首尾一貫性だけを考慮しつつ、運動を調整するしばられない能力をもった機関にゆずるべきことを示したからである。」そして「*Sindacato Italiano* は、新聞をとおしての宣伝、運動を助けて支え、勇気づけること……以外のことをおこなうべきでない。」とし、⁽⁸⁵⁾ *ネンチャーニ* も *sindacato nazionale* の機能について「宣伝を拡大するための隔週刊紙の発行、加盟労働組合組織に有効な情報をつたえる迅速な手段をもつ、賃金・労働時間の平等をめざす、また出来高の廃止をめざす⁽⁸⁶⁾ 全般的な運動を準備する。」こととしている。*クッザーニ* も同一のことを主張し、闘争の指導はもっぱら *カーメラ・デル・ラヴォーロ* がこれをおこなうべきだとのべている。

「すべての指導機能、すべての決定権限はもっぱら *federazione* にあった。……いまやわれわれはこの考えを完全に逆転させる。*federazione* または *sindacati nazionali* はその機能を調整、宣伝、統計的研究に限定すべきである。一言でいえば諮問的機関であるべきである。すべての指導権限、行動の指導、産業間の連帯、要するに組織の地方的活動に関するすべてのことは、もっぱら *カーメラ・デル・ラヴォーロ* の⁽⁸⁷⁾ 任務と機能である。」

ただし1913年11月の *USI* 大会への *クッザーニ* の報告では、*sindacato nazionale* にさらにつぎのような意義づけがくわえられている。

「*Sindacato* の機能は資本家を収用することによって労働者階級に自己の解放を実現する能力をあたえる意味で理解される。われわれの考えによれば、*sindacato* はすべての社会的機能——生産と交換の手段——を吸収するように、ソレルによって『国家のすべての権限を空洞化させる』と適切に総合化された他の公式を実行するように、つとめねばならない。」つまり「労働組合の努力が社会の経済的機能を吸収することにあるなら、経済活動の継続性を保証するのに⁽⁸⁸⁾ 適した機関になる点まで、労働組合を仕上げようとする必要がある。」この考えかたが、*レオーネ* にもあらわれていたことはすでにのべたとおりである。

表 USI の設立にくわった組織・人員

カーメラ・デルラヴォーロ		バルマ カストロカーロ ヴィアレージョ ガッラルーテ		18,000 ^人 800 450 1,000
産業別・職業別組合	鉄道組合 金属組合 金属組合 金属組合 建設県組合 れんが工単一組合 れんが工組合 れんが工組合 農業日雇労働者組合 土地職人組合	ミラノ トリノ ジェノヴァ ボローニャ ボローニャ ボローニャ モーデナ カルピ ロヴィーゴ フェッラーラ		25,000 1,500 350 1,000 3,500 1,164 1,000 285 300 1,500
単独レーガ		ジェノヴァ コモ ミラノ パヴィア クレモナ マントヴァ ヴェローナ ピアチェンツァ モーデナ フェッラーラ ボローニャ マッサーカッラーラ ルッカ リヴォルノ ローマ パレルモ (州抵抗委員会)	7レーガ 1 4 4 4 7 1 21 35 6 4 19 1 1 7	473 70 730 101 650 1,125 20 2,329 3,869 1,107 409 2,374 120 36 778 10,000
				80,040

A. Gradilone, "Storia del Sindacalismo III, 2, Italia" (pp. 28~29).

ただし、すぐ後にのべるようにナショナル・センターとしての USI は一定の寿命をもちえたものの、産業別 sindacato nazionale の設立のほうは、1912 年 8 月に金属の地方 sindacato 設立の方向が確認されたあとのピオンビーノ、エルバ、トリノにおける努力にもかかわらず、この部門における sindacato nazionale も実現しなかったし、また「単一レーガも 1911~13 年の闘いを生きのびなかつた⁽⁸⁹⁾」のである。

CGL に対抗するナショナルセンターたる USI が設立されたのは 1912 年 11 月 23~25 日にモーデナで開催された革命的サンディカリストの大会においてである。設立大会での報告者は A. デ・アンブリス、I. ビテッリ、F. ゴッキ、G. フェッラーニ、U. パガーニ、F. コッリドーニらで、USI の傘下には表にかかげられている組織と人員が参加した。

USI の規約が政党、政治グループからの独立をつよく主張していることは、革命的サンディカリストの理論からして当然のことである。

「……何人も USI に加盟しているという資格、USI から付託された任務についての資格を、いかなる選挙行為にも利用することができない。」(第 1 条)

「USI はすべての政党、政治グループから自立しており、かつ独立である。」(第 2 条)

USI の組織構造が水平組織たる「地方委員会」、垂直組織たる「産業別全国組合」から成ることは(第 3 条)、CGL のばあいと同様である。ただし水平組織と垂直組織のうちウェイトが前者にややかかっていることは、従来からの革命的サンディカリスト内部における論議より推察できよう。執行機関たる「執行評議会 (Giunta esecutiva) は、地方組織の代表 4、産業別全国組合の代表 3 をふくむように中央委員会によってえらばれる 8 人の代表で構成される。」(第 18 条) というように前者にやや重みがおかれている。産業別全国組合の指導機能をめぐる論議についてはすでにのべたが、USI の規約に明記されているところもこの論議を継承しており権限は抑制されたものになっている⁽⁹⁰⁾。

ただし革命的サンディカリストの運動の一定の高まりの復活も USI の設立が頂点であった。第 I 次世界大戦と、同大戦へのイタリアの参戦をめぐって革命的サンディカリストの内部に新たな対立が生ずる。革命的サンディカリスト

にとどまらず、左派の一部に戦争にたいして現状を変革する契機になるという革命的性格を付与する傾向があり、革命的サンディカリストにおけるこの傾向はF. コッリドーニ、A. デ・アンブリスを中心としていた。戦争の現状変革力を承認するばあい、それはブルジョアジーとプロレタリアートの対立という視点を徹底させ、その基軸からのみ戦争を把握する傾向と、変革の視点を「ヨーロッパの現状」におく傾向とが分岐する。「遠方の暴君にたいして長駆もたらされた悪口は、近くの暴君たち全員にたいしてもまた感情と武器になる。戦争という革命的事実、いまや、何世紀にもわたる社会主義のユートピア的予言よりもはるかに、人々に社会的正義の感情と意志をあたえるのに価値があることに気づく。」⁽⁹²⁾という視点は、上にのべた分岐の前者とみなせようが、実際は参戦主義にはしった革命的サンディカリストは、ヨーロッパの現状変革、つまりヨーロッパにおける民主主義国家、専制国家のバランスの変更という視点をとりいれる。この視点にたてば、たとえばカポレットの敗北は民主主義国家の危機、祖国の危機、偉大な国家という把握につらなり、「祖国は否定できない、獲得される。」⁽⁹³⁾、「労働者階級は貧しい国家を相続することに何の関心ももたない。」⁽⁹⁴⁾という立場につらなるのである。

1914年11月、USIは戦争の問題とイタリアの立場について討議するためにローマで評議員会を開催するが、デ・アンブリスらはヨーロッパ列強への親近感を表明する決議を提出、ローマニヤ、ミラノ、バルマの代表が賛成し、ポーロニヤ、ラ・スペツィア、フェッラーラ、ピアチェンツァ、ペルガモのカーメラ・デル・ラヴォーロの代表が反対した。バルマのカーメラ・デル・ラヴォーロでは数カ月後の1915年2月参戦の原理をうけいれている。こうしてUSIからは参戦主義者が分離する。⁽⁹⁵⁾

参戦主義者がぬけたあとのUSIは、「1915年からの数年間、戦争を原因として組織的の休息」⁽⁹⁶⁾にはいるが、戦後の労働者運動の高揚期には約500,000人を結集し、「工場占拠というこの時期のもっともドラマティックな経済的・社会的エピソードの主役となった。」⁽⁹⁷⁾ロシア革命とその後の推移にたいしては、革命がレーニンの個人独裁にはいりこんだとみなし、第IIIインターナショナルへの加盟を否認、1919年3月11～13日にローマで開催された第IV回全国大会はこの問題

についてつぎのような決議をおこなっている。

「USIの第IV回大会は—USIが第Iインターナショナルの諸原則に励まされて、長年、全労働者の全組織化へむけて展開してきたことを前提とし—すべての革命的労働組合組織を結集する国際的再組織化は、政党的性格がさいしょにあたえられたために、第III共産主義インター、したがって赤色労働組合インターにおいては達成しえなかったことを、まずさいしょに確認し、反集権主義、政治的諸グループからの労働組合の完全な独立の擁護者である革命的サンディカリズムの原則的な方法に言及しつつ、誕生時点から規約に明示されているUSIの基本的公準を支持するため、(フランス総同盟の立地点にたつて)予告されている全世界の革命的サンディカリスト各組織の国際会議にくわわることを決定する。⁽⁹⁸⁾」

だがイタリアの革命的サンディカリストははやくも無政府主義への回帰をはじめ。A. Gradiloneの“Storia del Sindacalismo, III, 2, Italia”によれば、大戦前から「革命的サンディカリズムは無政府主義者と連合して、アナルコ・サンディカリズムに移行しつつあり。⁽⁹⁹⁾」、大戦後「USIは本質的に無政府主義運動であることを示した。⁽¹⁰⁰⁾」のである。1920年7月のポーロニャにおける無政府主義者の大会後国内の無政府主義的労組の結合の中心となり、1922年にベルリンの大会で設立された自由—無政府主義インターのイニシアティブをとる。

〔注〕

- (1) V. Gianangeli, “Storia degli operai metallurgici—dalle origini all’avvento del fascismo”, p. 98, Dibattito Sindacale, 1968.
- (2) a cura di M. Antonioli e B. Bezza, “La FIOM dalle origini al fascismo 1901-1924”, p. 62, De Donato, 1978.
- (3) V. Gianangeli, 前掲(1), pp. 97~99.
- (4) M. Antonioli e B. Bezza, 前掲(2), p. 62.
- (5) 河野穰 「FIATにおける労使関係について(6)」, 中央学院大学論叢第17巻第2号 p. 202.
- (6) M. Antonioli e B. Bezza, 前掲(2), p. 279.

- (7) Il Metallurgico, 1, dicembre, 1907.
- (8) Il Metallurgico, 1, luglio 1908.
- (9) Il Metallurgico, 1, luglio, 1908.
- (10) Il Metallurgico, 1, luglio, 1908.
- (11) Il Metallurgico, 1, gennaio, 1908.
- (12) 河野穰 「FIAT における労使関係についての考察(2)」, 中央学院大学論叢第 16 巻第 1 号.
- (13) 「紛争が公然と開始されるはずである一方, 工業家レーガにくわっていない Itala は, カピアーティ教授をとおして, FIOM にトップによる労働協約の締結を提案した. 全国書記ヴェルツィによって個人的におこなわれた交渉は秘密りにすめられた。」 Pier Paolo Bellomi, “Lotte di classe, sindacalismo e riformismo a Torino 1898-1910”, p. 97, diretta da A. Agosti e G. M. Bravo, “Storia del movimento operaio del socialismo e delle lotte sociali in Piemonte”, volume secondo 所収. De Donato, 1979.
- (14) M. Antonioli e B. Bezza, 前掲(2), p. 55.

1907 年 1 月 23 日付. Avanti 紙上で E. Giretti はこういっている.

「何人かの社会党系の執筆者が, あまりにスキャンダルの多い保護でイタリアの納税者と消費者の犠牲で享受しているマラーニ議員と彼の連合した 33 の砂糖工場の仲間に, とつぜん, 惜しめない愛情を示そうとするとつぜんの配慮を理解できない。／ここ数日トリノを縦横にかけめぐっているのをきいた理由を意地悪く解釈し, くりかえすなら, 私もまた, Itala の団体協約, そしてまたおそらく Eridania 自体の団体協約をめぐる多くの議論のなかで, 何人かの社会主義者が, Figari 金融家, Eridania の王が巧みににぎっている砂糖独占にたいして, 情状酌量をしている状態を報告することができる。」 (Avanti, 23, Gennaio, 1907).

これにたいして 1907 年 2 月 1 日付 Metallurgico でヴェルツィはつぎのようにこたえている。「協約の署名者である私, および私が代表する名誉をにっている FIOM に関しては, 何人も個人的に, 砂糖独占に関係する Itala の金融家を知っていないこと, 労働協約の締結のような義務の遂行と利益の擁護はけっしてわれわれの自覚とわれわれの確信とを妥協させてみたり, 妥協を正当化するものではないこと, もしかかる妥協が明示的にも暗示的にも金融家により, または Itala の金融家により……課されたものであれば, 金属労働者階級は自己の自由と自己の権利を要求してエネルギーにこたえたであろうこと, われわれの穏和な, しかしねばりづよい活動は……あらゆる形の寄生性に反対することにむけら

れてきたことを、明言する。」

(Metallurgico, 1, febbraio, 1907).

(15) P. P. Bellomi, 前掲(13), p. 103.

(16) Il Metallurgico, 20, agosto, 1909, “le ultime vicende della nostra Federazione”

(17) *Ibid.*

(18) *Ibid.*

(19) *Ibid.*

(20) *Ibid.*

(21) 5月20日のこの集会への出席者は以下のとおりである。

ピエツラ支部・モンジラルディ, プレッシェ支部・オルニャーニ, コンドーヴェ支部・サルトーリオ, ノヴァーラ支部・フェッラーリ, トリノ鑄物工支部・マリオッティ, バヴィーア支部・アスカーニ, トリノ金属工支部・コロンビーノ, レッジョ・エミリア支部・シモンチーニ, ミラノ仕上工支部・シルヴェストリーニ, ミラノ青銅工支部・ジューディチおよびコミーニ, ミラノ鍛鉄工支部・アルフレリー, ミラノ鑄物工支部・パッレリーニ.

中央委員会……エミリア代表ムッシーニ, ピエモンテ代表モスコーニ.

指導委員会……コスタ, コルベッラ, ゲッツィ.

統制委員会……アスナーギ, アルフィエーリ.

書記局……ロッシ, コッチャ.

招待された者……ブオッツィ, スカローニ, ベッレッティ, トゥマテッリ, ラッザーリ, ファップリ他.

Il Metallurgico, 20, agosto, 1909.

すでに反ロッシ, コッチャの立場を鮮明にしているブオッツィらがのりこんできていることは書記の力のそう失を示すものであろう。

(22) Il Metallurgico, 20, agosto, 1909, “le ultime vicende della nostra Federazione”

(23) *Ibid.*

(24) *Ibid.*

(25) *Ibid.*

(26) *Ibid.*

(27) *Ibid.*

(28) *Ibid.*

(29) *Ibid.*

(30) *Ibid.*

(31) *Ibid.*

(32) *Ibid.*

(33) *Ibid.*

(34) *Ibid.*

(35) *Ibid.*

(36) *Ibid.*

(37) *Ibid.*

(38) 7月25日のこの集会への出席者は以下のとおりである。

レニャーノ鑄物工支部・ライモンディ, モルターラ混合支部・モラッジア, オメーニャ支部・アルヴァーニョ, ルイーノ支部・モンテッジア, プレッシェ支部・ヴェントゥーリおよびカッサゴ, パヴィーア支部・アスカーニ, ミラノ鉄製家具工支部・ボルリーニ, ポエーリおよびミラネージ, *Piccola Meccanica* 支部・グリッティおよびマッシアーギ, 研磨工支部・グイーディ, 鑄物工支部・バルベスティ, バッレリーニ, タローニおよびロンバルディ, 鍛造工支部・ペタッツィおよびマレンゴ, 青銅工支部・ファップリおよびコミーニ, ブリキ工支部・スピネッリ, 仕上工支部・パッツィ, トゥマテッリ, シルヴェストリーニ, レニャーノ金属工支部・ブランドーニ, イントラ支部・クニョーリ, モンツァ支部・サーラ, メルツォ支部・ズッキ, レッコ支部・ヴァルセッキ, フィレンツェ支部・チャッキ, トリノ金属工支部・コロンビーノおよびモスコーニ, ヴェルチェッリ支部・ロッソ, ビエッラ支部・モンジラルディ, アレッサンドリア支部・コルベッリ。

中央委員会……ベナート (ジェノヴァ), ムッシーニ (レッジョ・エミリア), モスコーニ (トリノ)。

指導委員会……ゲッツィ, コルベッラ, コスタ。

指導委員会臨時メンバー……ブオッツィ, バレストリーニ。

統制委員会……アンサーギ, ライア。

Il Metallurgico, 20, agosto, 1909.

(39) 第III回大回で *FIOM* 本部がローマからミラノにうつされたのにもなって, 書記もローマからミラノに転居した。

(40) *Il Metallurgico*, 20, agosto, 1909. “le ultime vicende nella nostra Federazione”

(41) *Ibid.*

(42) *Ibid.*

(43) *Ibid.*

(44) *Ibid.*

(45) *Ibid.*

(46) *Ibid.*

(47) *Ibid.*

(48) *Ibid.*

(49) 7月25日の集会はあくまで全国集会 (convegno nazionale) であって、規約に定められた正規の大会 (Congresso) ではない。したがって新しい指導委員会を選ぶことはできないはずである。この点についてモスコーニは「集会の決定が大会の価値をもつべきである。」と提案、旧指導委員会のメンバーであるゲッツィも「この集会は真の大会ではないが、しかしながら集会のおこなう決定は大会と同様の価値をもつ。」と発言、この発言を基礎として集会は運営された。

Il Metallurgico, 20, agosto, 1909. “le ultime vicende nella nostra Federazione”

(50) M. Antonioli e B. Bezza, 前掲(2), p. 346.

(51) *Ibid.*, p. 350.

(52) *Il Metallurgico*, 1, gennaio, 1908.

(53) *Il Metallurgico*, ottobre, 1908.

(54) A. Gradilone, “Storia del Sindacalismo, III, 2, Italia”, pp. 1~2, Dott. A. Giuffrè, 1959.

(55) D. L. Horowitz, “Storia del movimento sindacale in Italia”, p. 131, il Mulino, 1966.

(56) A. Andreasi, “L’Anarcosindacalismo in Francia, Italia e Spagna”, p. 50, La Pietra, 1981.

(57) *Ibid.*, p. 50.

(58) アルトゥーロ・ラブリオーラが社会党内の左派、改良派にたいする苛責なき批判者として出発し、1904年ごろから革命的サンディカリズムの理論へ移行したことはすでにのべた。この立場の移行は、たとえば、1901年のラブリオーラの発言と1904年の発言とを比較しても明確である。1901年の発言は、破局と革命の弁護、改良をとおしての社会主義の実現性がないことを強調する。

「トゥラーティおよび彼の数多くのおべっか使いが明らかにしている革命的戦術における唯一の正当化は改良の望みであろう。われわれは反対に全てか無かの熱狂的信頼者、不可避的な破局の崇拜者、いかなる代償をはらっても革命をという

主張の弁護者である…….

諸手段の有用性と効力をはかる唯一の基準は、われわれが最終目標に接近する速さが大きいか、小さいかである…….

勤労階級の革命的エネルギーが摩痺し、打負かされるという関係においては、つまり、われわれの社会の資本主義的全階級の利益とともに全階級間の利益の対立意識が弱まったり、稀薄になる関係のなかでは、社会主義運動は実際のな力と効力を失う、いかえれば、社会主義の漸次的実現が遠ざかる、つまりそれにくわえて運動の諸ステップが相互のあいだで距離がひろく、改良の可能性が不断に小さくなり、他方では最終目標のヴィジョンが心理的影響のすべての力を失うことが、この戦術の自然の結果である。穏健主義の結果は社会主義の摩痺である。」(Arturo Labriola, *Ministero e Socialismo*, Risposta a Filippo Turati, Carlo Cartiglia, “Il partito socialista Italiano 1892–1962”, p. 94, Loescher, 1978.)

これにたいして1904年の社会党第VIII回大会での発言には、職業別労働組合こそ資本家階級の統一的機関としての国家に対応する組織であり、勤労階級は国家の権限を議会と抑圧諸機関から職業別労働組合に移行させるという革命的サンディカリズムの理論があらわれている。

「資本家階級はその統一的な機関を国家のなかにみいだす。勤労階級はそれを国家の外部、職業別組合において形成しなければならない。資本家階級の成功が国家の抑圧的機能の増大であるのとおなじく、勤労階級の成功は職業別組合の増大である。階級闘争は、実際には、国家と勤労階級のあいだで闘われる。勤労階級の成功のすべては国家の機能の不成功である。勤労階級は同じく国家の獲得、つまり議会、執行権力の獲得によって自己の勝利を宣言する。勤労階級は国家の権限を議会と抑圧諸機関から職業別労働組合に移行させようとする。」(Arturo Labriola, *il discorso al congresso del PSI del 1904*, F. Livorsi, “il Pensiero politico italiano 1893–1943”, p. 66, Loescher, 1976.)

1904年4月の社会党大会におけるラブリオーラの発言はこの年の9月のゼネスト以前のもので、このゼネストの後にはゼネストの意義についての強調が顕著になる。

“Le Mouvement Socialiste” 1904年11~12月号に掲載されたレオーネの「イタリアにおけるゼネストとプロレタリアの政策」にはそのことが明瞭にみられる。

「最近のゼネストはイタリア労働者階級の経済的運動が十分に成熟し、同質的であること、この階級が自己の利益、自己の使命について自覚していること、この

階級にとって社会主義が単に議会活動の諸結果の仮定的な予測の体系であることをやめたこと、最後にこの階級にとって社会主義が国民的構造の基礎そのもののなかにふかい根をもっていることを、われわれに示している……。

最近のストライキは、私の考えでは、例外にとどまるべきでなく、……労働組合の政策にとって新しい時代の幕をきっておとすべきものである……。

このゼネストは、プロレタリアの代表たちがもはやあれこれの政府を支持するために、議会において時間と力を浪費する必要のないことを立証した。……このゼネストは、社会主義的プロレタリアートがその議会グループにいつそうエネルギー的な行動を要求しており、労働者階級はまだ未成熟だということをもはや恐れないことを示した……。

国家を支配階級からもぎとり、それをプロレタリアートに託すためには、投票用紙は不十分な手段である。プロレタリアートのなかに、社会化された経済活動を運営するのに必要な技術的能力をつくりだすことが重要である。……新しい生産制度は法律というひと打撃で即興的につくられるものでもないし、自然発生的にうみだされるものでもないし、ましてや社会的正義というばくぜんとした希望を基礎にして組織されるものでもない。今や、この経済的能力の訓練にもっとも適した機関は、プロレタリアートの経済的機関、労働組合に他ならない。将来のすべての訓練の根がここにあり、したがって労働者階級の最良の武器がここにあることを承認するのは、すべての議会活動が労働組合運動に付随すべきことをみとめると同義である。」(Enrico Leone, “Lo sciopero generale in Italia e la politica proletaria”, A. Andreasi 前掲56), pp. 280, 281, 284.)

なおこのレオーネの思想のなかには、労働者が「社会化された経済活動を運営するのに必要な技術的能力をつくりだすことが重要。」だと、のちのグラムシの工場評議会の思想とオーバーラップする部分がある。ただし労働者を訓練し、また権力の基礎構造となる機関が、労働組合であるのか、工場評議会であるのかという点で、両者の思想は相違する。

- (59) M. Bianchi, “Che i morti seppelliscono i loro morti !”, A. Andreasi 前掲56), p. 306.
- (60) *Ibid.*, p. 306.
- (61) R. Momigliano, “I sindacalisti e il Congresso socialista”, A. Andreasi, 前掲56), p. 307.
- (62) Arturo Labriola, “Alla vigilia del congresso di Firenze”, A. Andreasi, 前掲56), p. 313.

(63) *Ibid.*, pp. 316~317.

(64) S. ファズーロも社会党をでるべきでないという主張の理由を、革命的サンディカリストのもつ力量の限界に求め、また、かつて指導者の裏切りにたいして大会の開催を要求したが、その理由はなお有効のままだとしている。

「われわれはフェッラーラで決定した党をでるということを誤りだと考えた。それは時機の故だけでなく、サンディカリストの同志たちが彼らの強力なグループを形成する前に、また労働組合が多く場所で生じる前に、すべての組織からきりはなされてしまったら、数の点でも、質の点でも実りある活動をおこなえる発展段階にあるとは考えなかったからである。いまでも事態は大きく変わっていない。むしろ指導者によるプロレタリア組織の第1の裏切りに、第2の裏切りがつけくわったのである。第1の裏切りにさいして、われわれは党から離脱せず、むしろ各支部が宣言をおこなって大会を召集させたのであって、いまでもわれわれが大会を要求した理由は消滅しておらず、むしろくり返されている。」

(S. Fasulo, “una questione morale”, A. Andreasi, 前掲(56), p. 309.

(65) M. Bianchi, 前掲(59), p. 304.

(66) Ordine del giorno Gregori di adesione alla CGdL approvato al Congresso di Ferrara, A. Andreasi, 前掲(56), p. 340.

(67) バルマのカーメラ・デル・ラヴォーロの大会に集まった革命的サンディカリストは、ボローニャ、ピアチェンツァ、フェッラーラ、コモ、ブレッツァ、チェゼーナ、アンコーナ、ヴァレーゼ、ラ・スペツィア、セストリ・ポネンテ、サヴォーナ、サンピエールダレーナの各カーメラ・デル・ラヴォーロの代表（136,000人の組合員を代表）、2つの職業別組合の代表（52,000人の組合員を代表）、その他の小レーガの代表（6,118人の組合員を代表）、さらにトリノのカーメラ・デル・ラヴォーロの代表も参加した。（A. Gradilone, 前掲（54）, p. 6.）

(68) “L’ordine del giorno concordato Badiali-De Ambris al Convegno sindacale di Parma”, A. Andreasi, 前掲(56), p. 341.

(69) “Lo statuto regolamento”, A. Andreasi, 前掲(56), pp. 342~343.

(70) A. Gradilone, 前掲(54), p. 11.

(71) A. Andreasi, 前掲(56), p. 59.

(72) A. Gradilone, 前掲(54), p. 13.

(73) *Ibid.*, p. 14.

(74) 1909年5月のこの大会に出席したのは、バルマ、ピアチェンツァ、アンコーナ、サンピエールダレーナ、ピオンビーノ、サン・フェリーチェ・スル・パナーロ、

ナポリ、アドリア、フェッラーラ、ブレッシア、ピチェンツァのカーメラ・デル・ラヴォーロの代表、ローマの労働総レーガの代表、鉄道組合の代表等である。1907年10月のバルマ大会へ出席したカーメラ・デル・ラヴォーロと比較して若干の入れ替りがあるものの、数にさしたる差はない。(A. Gradilone, 前掲(54), p. 14.)

- (75) *Ibid.*, p. 15.
- (76) 河野穰 「FIAT における労使関係についての考察(2)」, 中央学院大学論叢第 16 巻第 1 号.
- (77) A. Gradilone, 前掲(54), pp. 23~24.
- (78) *Ibid.*, pp. 28~29.
- (79) A. Andreasi, 前掲(56), p. 63.
- (80) C. Nencini, “Per l’Unione sindacale italiana. Sindacato operaio misto. Programma e scopo di lavoratori ribelli !”, A. Andreasi, 前掲(56), p. 386.
- (81) A. Andreasi, 前掲(56), p. 63.
- (82) “Per la costituzione di un Sindacato nazionale metallurgico”, A. Andreasi, 前掲(56), p. 377.
- (83) C. Nencini, “La necessità del Sindacato metallurgico”, A. Andreasi, 前掲(56), pp. 382~383.
- (84) E. Cuzzani, “I Sindacati nazionali d’industria”, A. Andreasi, 前掲(56), p. 397.
- (85) 前掲(82), p. 377.
- (86) C. Nencini, 前掲(83), p. 383.
- (87) E. Cuzzani, 前掲(84), p. 405.
- (88) *Ibid.*, pp. 398, 400.
- (89) A. Andreasi, 前掲(56), p. 65.
- (90) USI の規約第 4 条は各地方委員会の任務をつぎのように定めている。

「各地方委員会は、(a) USI の書記と連絡をとり、書記が当該地方の、また時に応じて近辺の組織について要求するすべての資料を提供し、(b) 金銭を徴収し、加入を書記に伝え、(c) USI の通達をうけて関係者に知らせ、(d) 宣伝をおこない、未加盟組織の USI への加盟をすすめなければならない。」

また第 8 条は産業別全国組合の任務をつぎのように定めている。

「産業別全国組合は、(a) 自らの産業部門の労働者のあいだで特別の宣伝をおこない、同労働者のあいだで新しいレーガの設立を促進し、(b) 一般に自らに属する全国的性格の運動を指導し、地方的性格の運動をたすけ、(c) 特別の全国大会を召集し、(d) 各レーガおよび労働組合に加盟しているグループのあいだに発生する紛争

を解決しなければならない。」

(A. Gradilone, 前掲(54), p. 101.)

(91) グラムシやトリアッティもこのような立場にあった。(河野穰「イタリア共産党史 1921～1943」pp. 25～26.)

(92) F. Cordova, “Le origini dei sindacalisti fascisti” p. 1, Laterza, 1974.

(93) *Ibid.*, p. 1.

(94) *Ibid.*, p. 2.

(95) 参戦, イタリア国家への傾斜をもつ部分ではミラノにおいて旧ミラノ労働組合委員会を軸にして, 大戦中および戦後に目ざましい活動を展開し, この運動を1918年6月にUIL (Unione Italiana del Lavoro) に転換する。'コッリドーニをトップにおくミラノのUnione Sindacale はいちはやくこの運動にくわわっている。UILの綱領にはつぎのような主張がみられる。

「UILはいっさいの政党から独立に自己の行動を展開しようと意図する労働者の組合を結合する。UILは、賃金労働者の資本主義に対する闘い、この制度を維持しようとするすべての組織に対する闘いをすすめ、生産・流通・富の交換の管理を、直接、組織された勤労者階級に移管することを目的とする。UILは兄弟のように仲良くすることができる諸国の……勤労者のあいだの国際的連帯の原則と調和させながらその活動を実行しつつも、労働者階級がけっして否定すべきでないイタリアの発展と自由の全般的条件をけっして度外視せず、諸機構を獲得し、それを根本から革新するであろう。したがってUILは経済的獲得物のためにのみ階級の闘いをおこなうのではなく、生産・文化・社会的正義にかんするすべての問題を解決するプロレタリアートの尊厳と能力を評価し、高めるものである。」(A. Gradilone, 前掲(54), p. 104.)

ここにみられるようにUILは階級的であるが、国家感情、祖国という観念につよく傾斜していた。

その後ファシスト運動が強固になるとともに、UILの指導者たちのあいだでファシズムにたいしてとるべき態度で対立が生じ、ロッソーニを中心とする何人かはUILをはなれ、自分たちが掌握していたレーガの出資分をファシズム運動へ持参した。ロッソーニの他にかつて革命的サンディカリストの指導者であり、のちにファシスト組合運動の幹部に移行した者にピアチェンツァのA. ボルギ、モーデナのマッサロッチェ、フェッラーラのM. ビアンキ、バルマのA. デ・アンプリス、ポローニャのC. ボナッツィらがある。

(96) A. Gradilone, 前掲(54), p. 102.

(97) *Ibid.*, p. 103.

(98) *Ibid.*

(99) *Ibid.*, p. 16.

(100) *Ibid.*, p. 102.